住宅建築賞2025

審査員 審査員長:吉村 靖孝
審 査 員:岡安 泉／小西 泰孝／中川 エリカ／西沢 大良

主催 一般社団法人 東京建築士会

企画 東京建築士会 事業委員会

後援予定 公益社団法人 日本建築士会連合会
一般社団法人 東京都建築士事務所協会
一般社団法人 日本建築学会 関東支部
公益社団法人 日本建築家協会 関東甲信越支部
株式会社 新建築社
株式会社 エクスナレッジ

協賛 株式会社 アイ工務店
株式会社 市浦ハウジング＆プランニング
環境・省エネルギー計算センター
株式会社 建築資料研究社
株式会社 総合資格
株式会社ピアレックス・テクノロジーズ
株式會社 豊和

お問合せ先
一般社団法人 東京建築士会
中央区日本橋富沢町11-1富沢町111ビル5階
TEL:03-3527-3100　FAX:03-3527-3101
[E-mail] event02@tokyokenchikushikai.or.jp
https://tokyokenchikushikai.or.jp

©佐々木慧

©Kenta Hasegawa

©Daici Ano

©morinakayasuaki

住宅建築賞 入賞者

住宅建築賞 金賞

神田 篤宏 + 佐野 もも

住宅建築賞

玉田 誠 + 脇本 夏子
竹内 吉彦
中村 俊哉 + 藤井 愛
南 俊允

住宅建築賞 奨励賞

隈 翔平 + エルサ・エスコベド

一般社団法人 東京建築士会
TOKYO SOCIETY OF ARCHITECTS & BUILDING ENGINEERS

RESIDENTIAL ARCHITECTURE PRIZE

住宅建築賞2025入賞作品集

住宅建築賞 入賞作品

2025年 | 一般社団法人 東京建築士会

応募主旨

審査員長　吉村 靖孝

【東京のグローバリティ】

昨年と一昨年の2年間は「東京のローカリティ」というテーマのもと作品を募った。手前味噌ながら優れた作品を集めることができるなかなか良いテーマだったので、今年もそのまま「東京のローカリティ」を踏襲しようと思っていたのだが、しかし逆にグローバリティを問うてはどうか、という一縷の望みがムクムクと沸き起こった。天邪鬼な私をご容赦願いたい。今年は昨年とまったく逆のテーマで募集することとしたい。日本には今、円安で大量の外国人が流入している。出国する日本人の数の倍を優に超える人が海外から来る時代である。日本人は国内にいても国際的にならざるを得ないと言えるだろう。またSNS全盛の時代にあって日本の住宅は、たとえ敷地が国内であろうとも海外でいきなり注目を集めることが容易になった。逆に海外に事務所を置くのもあり得る。海外の作品は住宅建築賞の枠の中では見ることができないのだが、彼らが東京でやった仕事というならそれもあり得るだろう。あるいは建築というメディアはノンバーバルで国境がないというが、それも新たな次元を迎えていると言えるだろう。建築をめぐる言説は有効だと思うが、それもSNSを前にすると消えてしまう。そのとき建築はどういう顔をしているのだろうか?答えを求めるものではないが、今この時点のグローバリティとの向き合い方を問いたい。「東京のグローバリティ」は可能か。その可能性を押し広げるような作品の応募を期待している。

応募要項

(1)上記の主旨にかなうもの
(2)一戸建住宅、集合住宅及び併用住宅等とする(大幅な増改築、公共の建築も含む)
(3)原則として作品は下記提出期限日より3年以内に竣工したもの
(4)雑誌等に発表したものでもよい
(5)建築物の所在地は1都3県(東京都、埼玉県、千葉県、神奈川県)とする
(6)応募の点数は自由とする
(7)審査員の関与した作品は応募できない
(8)応募者は予め建築主(所有者)・施工者の了解を得て応募すること
(9)応募作品の確認申請及び検査済証が必要。応募作品が確認申請不要物件の場合は違法であること

応募要件

賞の対象
設計者・建築主・施工者の3者を顕彰するものとする。

応募資格
応募作品を設計した建築士資格を有し、建築士会正会員である者
登録料 本会正会員:無料 (申込時に入会した方を含む)
他道府県 建築士会 正会員:1点につき5,000円 (作品を郵送する場合、登録料は現金書留にてお送りください)

提出資料
・本会指定申込書　・本会指定A2版台紙　・確認申請および検査済証のコピー(確認申請不要物件は、不要理由を明記した文章)
図面及び完成写真数点(内・外観)、平面図、立面図、断面図、配置図、設計主旨(300字以内)等をA2版台紙一面(本会指定の用紙・縦づかい、パネル化しない)におさめること。なお、写真の大きさ図面等の縮尺及びレイアウトは自由とする。プレゼンテーションの表現自体は、審査の対象としない。

提出資料取得方法
申込書及び本会指定A2版台紙は本会事務局において頒布します。郵送希望の場合は、宅配便着払いにてお送りできます。
専用申込フォーム(右記QRコード)にてご請求ください。
※土・日・祝日の発送は行っておりません。原則即日発送は致し兼ねますので、お時間に余裕をもって請求ください。

提出先・問合先
一般社団法人東京建築士会　住宅建築賞係
〒103-0006 中央区日本橋富沢町11-1富沢町111ビル5階　TEL 03-3527-3100

提出期限
2025年2月7日(金) 窓口へ直接お持込みの場合は、2月7日(金)17:00 迄とする。郵送の場合は、2月7日の消印有効。

審査員

審査員長 吉村 靖孝

審査員 岡安 泉／小西 泰孝／中川 エリカ／西沢 大良

審査

1 書類審査に通過したものは原則として現地審査する。　※現地審査はマスク着用の上、手指消毒等の感染対策を行い訪問いたします。

2 入賞発表　2025年4月下旬
・審査結果については、応募者に直接通知する
・応募者は審査結果について異議を申し立てることができない

表彰及び賞金

1 入賞者(5点以内)に対し賞状(盾)及び賞金を贈り、入賞者の中から特に優れたものには金賞を贈る。
住宅建築賞 70,000円　住宅建築賞金賞 150,000円

2 建築主、施工者には入賞を記念する盾を贈呈する。

3 表彰式:本会定時総会の席上(6月上旬開催予定)

応募図面の取扱い

1 応募A2版台紙の公表及び出版の権利は主催者が保有する。

2 入賞作品は本会ホームページ及び会報等に掲載する。また、入賞作品展(公開展示:8月開催)の予定がある。

3 入賞作のうち、東京都内に建築されたものの中から1点を「関東甲信越建築士会ブロック会」の優良建築物表彰作候補作品として、推薦することがある。

4 応募作品は返却しない。

審査結果(2025年 住宅建築賞)

応募点数 63点　住宅建築賞 入賞5点(内金賞1点)、奨励賞1点

住宅建築賞 金賞	ハウスアバブハウス (東京都)	■設計者:神田篤宏+佐野もも(コンマ,一級建築士事務所comma) ■建築主:登尾翼+登尾奈緒子 ■施工者:株式会社中野建設工業(建物構造:木造在来軸組工法)
住宅建築賞 (受付順)	CHIGASAKI HOUSE (神奈川県)	■設計者:玉田誠+脇本夏子(玉田脇本建築設計事務所) ■建築主:瀧本恭平 ■施工者:横溝建装(建物構造:木造(在来)一部RC造)
	白い邸 (東京都)	■設計者:竹内 吉彦(t デ) ■建築主:匿名希望 ■施工者:シグマ建設株式会社(建物構造:木造)
	飯田邸 (東京都)	■設計者:中村俊哉+藤井愛(ship architecture) ■建築主:飯田辰慶+飯田啓子 ■施工者:株式会社山下工務店(建物構造:木造)
	SHINJUKU NEW VILLA (東京都)	■設計者:南俊允(株式会社南俊允建築設計事務所) ■建築主:シマダアセットパートナーズ株式会社 佐藤悌章 ■施工者:株式会社大原工務所(建物構造:壁式RC造)
住宅建築賞 奨励賞	House by the temple (埼玉県)	■設計者:隈翔平+エルサ・エスコベド(KUMA & ELSA) ■建築主:篠原徹+篠原郁美 ■施工者:株式会社池田工務店(建物構造:木造)

参考資料

一次審査結果　2025年2月26日(水)実施。応募作品63点より、1人7点～9点を投票

【投票内訳】

投票した作品番号

審査員	作品番号								
吉 村	4	20	21	22	25	42	44	54	55
岡 安	4	10	13	20	22	26	41	45	51
小 西	25	30	37	38	44	48	54	59	—
中 川	11	22	38	48	54	59	60	—	—
西 沢	21	22	42	46	54	59	60	—	—

投票結果 (計23点)

獲得票数	作品番号	合計
4 票	22、54	2作品
3 票	59	1作品
2 票	4、20、21、25、38、42、44、48、60	9作品
1 票	10、11、13、26、30、37、41、45、46、51、55	11作品

投票で選出した23作品より議論のうえ、
下記6作品を一次審査通過とし、二次(現地)審査対象とした。
二次(現地)審査は、3月11日(火)に実施した。

21 22 25 44 54 59

一次審査風景

作品講評

総評

審査員長 吉村 靖孝

今年の住宅建築賞は「東京のグローバリティ」という昨年とはまったく逆の課題を掲げたので、どうなることかとヒヤヒヤさせてしまったのではないかと思いますが、結局のところ応募総数63点を得ることができました。グローバリティとローカリティは意味のうえでは対照的ではあるものの、実際は昨年の応募作品をリトライしようという応募案もありました。それをわれわれ審査員がどう捉えるかと言う話ですが、まったく問題がないように思います。昨年は東京のローカリティを基準に審査し、今年は東京のグローバリティを基準に審査する、それだけのことです。

まず金賞をお渡しした「ハウスアバブハウス」をとばして、それ以外の5つの作品について簡単なコメントをさせていただきます。

「CHIGASAKI HOUSE」は周辺の住宅地の説明から入ったのがとても良かったです。微妙に異なる周辺の土地の高さが内部空間のスキップ・フロアのきっかけになっていることがはっきりと伝わりました。6人が暮らすという高密度な住み方には、もう少しそれぞれの生活の連鎖があった方がさらに良い提案になるのではと思いました。

「House by the temple」は寺を眺められる位置に建つ住宅です。外国人と日本人の手になる建築と言う事で、ディテールには自ずとグローバルな一面が見える一方で、北に影を落とさないよう南に向かう円形や、一階で敷地境界から距離をとる塀など、本来根幹であってもよいひとつひとつの操作が小さいように思いました。これは私たち審査員の見識が問われるのですが、一歩足らずと奨励賞にしました。ぜひ表彰式で反論を。

「飯田邸」は少ない操作で組み上げた、大変野心的な住宅作品でした。切妻の4分の1が大きくガラスで切り取られ庭になっています。二階のように見えるスラブもここまでが踊り場、ここからはキャットウォークになっているなど、なるほどと思いました。木が育ち切り取られた4分の1がそれで埋まったときにも、ぜひここを訪れてみたいと思いました。この案は最後に最優秀と競るのですが、一歩及ばずでした。

「SHINJUKU NEW VILLA」は曲線を惜しみなく使う、非常に高精度で設計された意欲作です。個別の審査講評でも書きましたが、外への視線の抜けがあることが、この作品にとって鍵かもしれないということです。それが意識下でつながりはじめると、もう一段高みに到達できるのではないかと思いました。

「白い邸」は最近良くみるシンメトリーです。一方で、内部空間はまるで迷路のようにつながったりはなれたりします。これは昨年からつづく、そしてある種の主流をなしていると言っても良い、ポストモダン建築の流れに組み入れられるでしょう。昨年、私は呼び名を宿題としましたが、今はポスト・ポストモダンとしか呼びようがないと思っています。日本の住宅建築に見られるこのような流れをどのように海外に伝えるのか、興味がつのります。

最後に金賞を獲得した「ハウスアバブハウス」についてのべたいと思います。これは設計者が新築の依頼を受け、しかし既存の躯体を残してリノベーションにした案件です。既存の一階は屋根がそっくり取り払われ、新しい躯体の二階の床とここでは関係あるようなないような微妙な距離を保ちながら挿入されます。もともと屋内だったところが半屋外として切り取られているのも、また和室が極端に低い位置に据えられたのも、気が利いています。一階には二階の構造壁となる壁がところどころに出てくるのですが、その位置がプランとすり寄る様は圧巻と思いました。この作品に金賞を贈り、今年の住宅建築賞は無事に幕を閉じました。

さて、東京のグローバリティと言った時、いったい何が基準になるのでしょうか。審査のおり、現場でそれぞれに「この作品にとってグローバリティとは何か?」を聞くのですが、その答えは、時間であったり、扱う人数であったり、設計する人間そのものであったり、とバラバラでした。つまりここから日本の住宅作品の独特のドグマを暴くことは難しかったと言わざるを得ないのですが、つきつめると、バラバラであることそのものがグローバルである、という矛盾が浮かび上がってきます。ぜひこの基準におもねることなく、来年も自らの道をつきつめてください。

一次審査風景

作品講評

2025年 住宅建築賞 作品講評

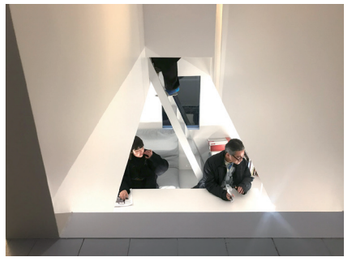
住宅建築賞 金賞 | ハウスアバブハウス | 設計者 神田 篤宏＋佐野 もも（コンマ, 一級建築士事務所comma） | 講評者 西沢 大良

半世紀あまり続いた郊外住宅街で、思いもよらぬ実験を行なった建築。東京都の戸建て住宅街に立つこの住宅は、竣工直後であるのに、いきなり周囲の家屋に馴染んだ「ヴァナキュラー建築」のような姿を見せる。もともと「ヴァナキュラー建築」と呼べるような建築は、郊外住宅街においては生み出しようがないと、建築界では長らくサジを投げられてきたのだが、この建物の場合は1階を古屋の改修とし、2階を新築とするという実験的なつくられ方により、近隣家屋のもつ一種の文法を―どの家屋の立面も小規模の壁の連続によって形成され、1階と2階がヒサシやセットバックで分節されているといった文法を―かたちを変えて取り込んでおり、郊外住宅街における史上初の「ヴァナキュラー建築」のような住宅を出現させたのである。この実験の根底には「古い家屋と新しい家屋を“等しく”重視する（どちらも貴重な建築的資産である）」という設計思想が感じられるが、その可能性を確かめるように豊富なアイデアが随所で編み出され、魅力的な成果をあげている。例えば1階と2階の役割分担には説得力があり、どちらも住空間として魅力的である（小部屋の多い古家の1階を個室中心のプライベートゾーンとし、2階を対照的に広大なワンルームとしたこと。また1階と2階の間に欄間を設けて古家の暗さを払拭したこと）。あるいは1階を改修していく過程で部屋の用途を発明したことも新鮮である（8畳の和室を半屋外の中庭へ転換し、周りと一体の快適な水回り空間としたこと。その延長で外構についても砂利とブロックと保存樹による古びた神社のような空間としたこと）。もちろん先述した建物全体のヴォリューム処理も秀逸で、近隣家屋次第でさらなる発展の可能性を秘めている（今回の敷地のように近隣家屋に共通性がなく、相異なる家屋群に囲まれた場合に、より大胆な展開が予想される）。一見すると、壊しているのかつくっているのかわからぬように見えるかもしれないが、この実験には見た目以上の価値がある。グローバルに言うならば、戦後に日本を含む旧G7諸国で膨大に量産され、今ではG20諸国で無思想のまま量産され続けている郊外住宅街なるものは、将来的にはこのような建築の実験場になりうるのだという、稀有な発言を行った作品だからである。

住宅建築賞 | CHIGASAKI HOUSE | 設計者 | 玉田 誠＋脇本 夏子（玉田脇本建築設計事務所） | 講評者 | 小西 泰孝

一見すると極めてシンプルな矩形の外観でありながら、内部には驚くほど多様な空間が展開されており、応募資料からはその設計上の工夫がよく伝わってきた。三世代六人が暮らす住宅として、半地下から屋根までをつなぐ五層のスキップフロアが、それぞれの居場所を確保しながらも、全体としての空間の一体感を生み出している。建物の角に設けられた二方向の伸びやかな開口部も、外部との関係に奥行きをもたらし、視覚的な広がりを生んでいる点が印象的である。構造と空間の関係性も非常に巧みに設計されており、壁内に斜材を仕込んで柱を省略することで抜けのある空間を実現する一方で、柱や梁をあえて見せることで空間のリズムや方向性を生み出している。その使い分けが実に自然で、空間全体に豊かな表情を与えている。さらに、露出された杉材の柱と梁を同一スケールで整えることで、縦横の連続性が均質に保たれ、空間に秩序をもたらしている点も高く評価できる。

住宅建築賞 | 白い邸 | 設計者 | 竹内 吉彦（t デ） | 講評者 | 岡安 泉



同規模の住宅が密集する都内の住宅街に建つこの白い直方体の住宅は、各立面に小さな窓を整然と並べ外部からの視線の制御を行い、そのために制限される室内の明るさを屋上に設けた東西方向に長く伸びる天窓で補う構成となっている。日中、天窓から入る光の半分は吹き抜けを介して1階に届き、そこに階段の隙間からの間接光と北側開口からの外光も加わり1階広間が柔らかい光で充たされるよく考えられた採光計画である。天窓から入る光の残りの半分は2階ホールに留まり、その様子を各所から眺めることができる空間構成で、このホールの間隔の狭い2枚の白い壁は、反射板として機能し、太陽光の僅かな変化を増幅する役割を果たしている。それがシンメトリーな空間の中央に配置されることで、居住者は太陽光の小さな変化ですら意識することができる。太陽光の変化を価値として捉え、それを楽しむための居場所を作るようにして組まれた空間構成でありながら住空間としての要望を満たした点を評価したい。

住宅建築賞 | 飯田邸 | 設計者 | 中村 俊哉＋藤井 愛（ship architecture） | 講評者 | 中川 エリカ

延床面積50㎡の小住宅。しかし、狭小住宅という言葉が一般的に示すような窮屈さとは逆の、とてもおおらかで広がりのある住環境であることを現地審査の際に、審査員一同で体感した。数字を超えた広がりを持っている要因は、主に3つある。まず、田の字型プランの3/4が家、1/4が庭となっているのだが、庭に向けてL型かつ2層分の開口を設けることで、庭を飲み込むような開放感を持っていること。次に、2階床梁と棟梁を繋ぐ斜材を入れ、トラスのように扱うことで、1階を無柱としたこと。最小限の手数で最大限の効果を得る軸組により、吹き抜けを介した天井の高さと、階段を対角線上に入れることによる視線の抜けも獲得していた。そして、サイズの小ささを、建築と身体の近さと読み替えたことにより、建築の部材から飯田さんの持ち物まで、家の中に現れるすべての材料が断絶なく連続したまとまりとなっていること。家の作り方によって、家と人間の相補的な関係を生み出しており、時間をかけて住めば住むほど相補関係が強固になることを予感させた。唯一、家のサイズに対して大きなダイニングテーブルがあるのだが、このテーブルが、飯田邸にとって不可欠で中心的な場を生み出している。全てが小さいわけではない、ということがまた、おおらかな広がりを生み出す要因になっていたことも、とても興味深かった。

住宅建築賞 | SHINJUKU NEW VILLA | 設計者 | 南 俊允（株式会社南俊允建築設計事務所） | 講評者 | 吉村 靖孝

設計者がこの集合住宅を楽しんで設計したであろうことは容易に想像できた。スラブのエッジが描くカーブや曲線の壁が縦横に走り、緑も効果的に配されており、空間らしきものを掴んでいると思った。しかし、これほどまでに高精度で計画された建物だが、どこを見れば良いのか非常に曖昧に設計されていると感じた。外を見れば良い建物なのか、内を見れば良い建物なのか、迷うのである。たぶん外に視界が開けることから来る、見てはいけないもの（＝周辺の外）を見てしまった感覚、と言うべきか。これはドミノのように計画されたフォルマリズムから来るものなのか、もっと外を見たいという欲望から来るものなのかはわからないが、もしかするとその両方かもしれない。そういえば、設計者は隣地のオーナーがこちらの敷地に興味を持ってくださり、一部の造園が越境しはじめていることをとても嬉しそうに語ってくれた。設計者の外に対する意識は、われわれ審査員のもつ意識とはくらべものにならないのかもしれないと感じた。そこに期待したい。

住宅建築賞 奨励賞 | House by the temple | 設計者 | 隈 翔平＋エルサ・エスコベド（KUMA & ELSA） | 講評者 | 吉村 靖孝

住宅建築賞の審査は、竣工後3年以内の住宅が審査対象となっているため、住みはじめて幾分かの時間が経過し、どちらかといえば片付けてもらい審査するのが一般的である。この住宅のように竣工前に施主が海外勤務となり、まったくノイズのない状態を審査するのはなかなかないことだった。そのことが結局この住宅の審査を通じて不利に働いたのではないか。一階で庭とのつながりを求めるもそこに人はおらず、二階で寺を眺めるのもまた無人で、我々審査員の想像力を試されているような審査だったことが記憶に残っている。しかし、逆に建物がなぜ緑色なのかなど小さなことが気になって、隣地の建築の屋根や、その反対側の隣地の壁と呼応する様はすんと頭に入ってきたし、審査員がバスに戻る際に見た集合住宅までそのルールを守っているように見えはじめたのは驚きであった。一階の塀がジグザグを描きながら境界線から離れていることなどは、小さな事であるが効果を持って立ち現れていた。それらの小さなことが連鎖し、大きな営みに結びつくことを期待したい。

二次審査風景

北側外観。元道路、現行駐車場と敷地にあったものを一緒くたに含み込み、スペースを利用しながら、非常の空間を。

室1。既存躯体による小さな平面と上部に抜けをもつ高天井。

玄関と洗面浴室を見る。既存架構の上部には新設2階の床組が重なる。

既存と新設の架構に挟まれた空間。

一体的な空間とした新設の2階。天井高を抑え水平に広がる空間とした。

ハウスアバブハウス

敷地は50年ほど前に田畑を開発してつくられた住宅地の一角にある。更地渡しの土地に新築住宅を建てる依頼であったが、敷地には解体予定の既存家屋の他にも前の住人が植えたカキやママが育っていたり、頓挫した道路計画の名残が残っているなど50年の時間の積み重ねがあった。この計画では、敷地をまっさらにリセットして何事もなかったように新しい建築をつくるのではなくそこにある古家や既存樹木も含み込みながら新たな住まいと既存のものが同時に存在していくような建築を考えている。

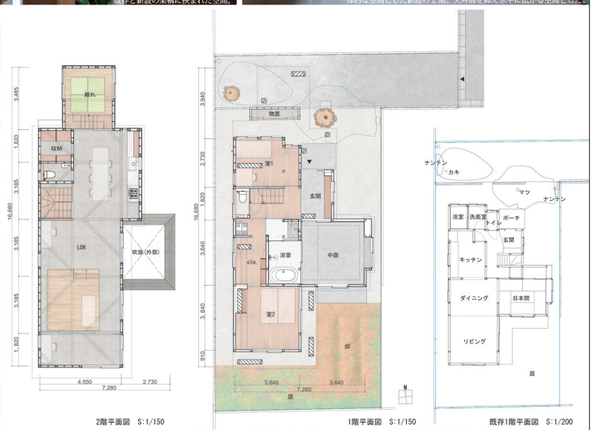
住宅の構成としては既存建物の2階床梁から下を残し、その上にコンクリートの高基礎＋木の壁柱で新たな2階の住居を持ち上げて重ねるような構成としている。2階のピロティ下に既存の家屋があるような、既存を俯瞰し、新規を見上げる双方向の体験は、異なる事象を身体が横断する日常を住宅にもたらす。

既存部と新築部は構造的・物理的に分離させ、例えば将来には2階を残して1階部分をつくりかえる事も可能とし、継続的に続く環境を引き受けながら履歴を重ねていく建築の在り方を目指した。

古家や敷地の履歴を残しながらの設計ということで、コントロールしきれないものが必然的に設計の領域に含み込まれていく。ただそれは不自由というよりも、より大きな関係性の広がりにつながるのではないかと考えている。

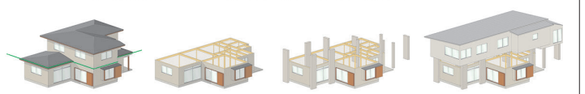
配置図 S:1/3000

断面図 S:1/100



2階平面図 S:1/150　1階平面図 S:1/150　既存1階平面図 S:1/200

2階を支える新設の壁柱を配置しながら、元の平面を読み替えていった。既存の和室を中庭として屋外化したり、ダイニングを浴室とする、既存の壁と新設壁の間にデスクスペースを設けるなど、対照的に2階は大きな1室空間とした。



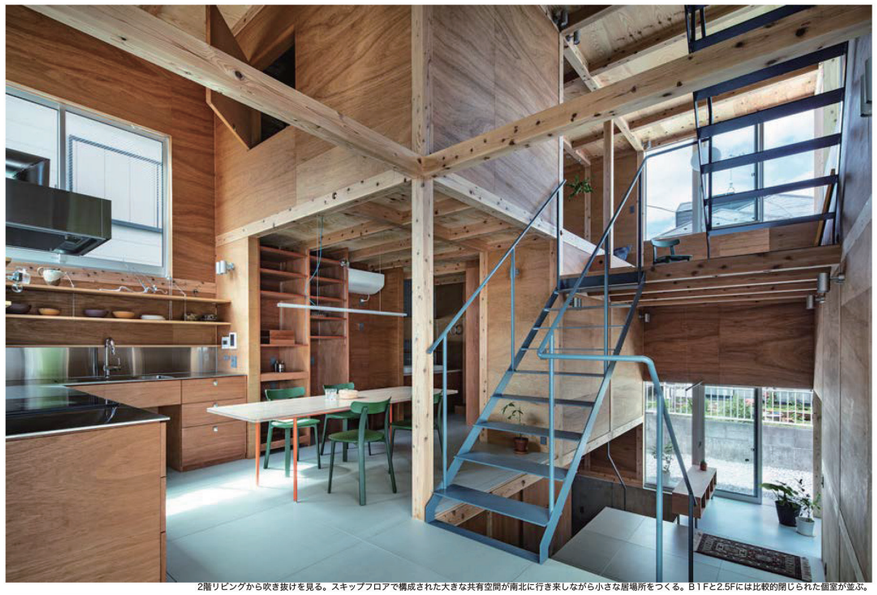
2階フロアから離れを見る。

元道路の上に建つ離れ。

奥に既存躯体見える。

1階から既存空間を見る。

東側外観。既存家屋の上に持ち上げられた新設の2階。


2階リビングから吹き抜けを見る。スキップフロアで構成された大きな共有空間が南北に行き来しながら小さな居場所をつくる。B1Fと2.5Fには比較的閉じられた個室が並ぶ。

CHIGASAKI HOUSE

「群れ」の住まい

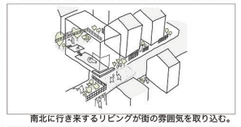
3世代の6人が共に暮らす112m2の住まいである。海沿いの明るく陽気な雰囲気をもつ住宅密集地で、親世帯の住まいを子世帯と合わせた2世帯住宅へ建て替える計画だ。子世帯の夫婦は近所で店を営んでおり、小学生の子供は祖父母と多くの時間を過ごす。親世帯は自宅を仕事場としたり都市部へ出たりなど、6人の暮らし方や関係性は多様であった。数々は6人がそれぞれ個性ある過ごし方をしながらも、一緒にいられるような住まいを考えることとした。魚の「群れ」が集まったり離れたりを繰り返しながら、ゆるやかなまとまりをつくるような住まいのかたちだ。

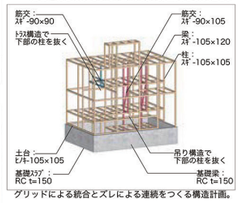
全体は半地下から屋上まで続く5層のスキップフロアとして、大きな吹き抜けでつながる共有空間と最小限の個室群で構成した。立体的な共有空間は南北を行き来しながらズレることで、視線を遮りながらも緩やかにつながりを持った場所になっており、個々の居場所をつくりながら、みんなで集まれるような場所ともなっている。半地下階と2.5階にある4.5~7.3m2ほどの小さな個室群は建具や可動家具の開閉によって室同士を連続させるなど、共用空間との繋がり方を選択できる。つながり方・居場所に多様な選択肢をつくることで住まい手の性質や住まい方が変化しても柔軟に住まうことができると考えた。

それぞれが個々に多様に過ごしながらも、時にまとまり、助け合い喜びを分かち合う。社会の変化に呼応しながら姿形を変えていくような「群れ」のための住まいとして、従来の家族単位で考えられてきた集合の形を、関係性を単位としてつくられる新しい集合の形となることを期待している。

核家族の箱ではなく6人の暮らしが重なる新しい住まい。

スキップフロアと床のずれによる小さな居場所の連続。


南北に行き来するリビングが街の雰囲気を取り込む。



グリッドによる統合とズレによる連続をつくる構造計画。

立体的な居場所の集まり

全体をグリッド状に構成しつつ部分的に柱を抜いたり梁にズレを設けることで、空間に連続性と一体感のある広がりをもたせた。床の高低差でできたズレは小さな居場所をつくり、その境界には腰かけたり、もたれかかったりといった身体的なふるまいが生まれ多様な暮らしの風景が広がる。また、南北の庭をつなぐ空間構成は、周りの密集する住宅の親密な雰囲気やそれらが南側にもつ小さな庭の緑の環境を内部に引き入れる。

前庭からの外観。建築の角に設けたL字型の開口によって、多方向から光が差し込み、風が通り抜け、周辺の小さな庭の環境が建築内部に入り込んでくる。

前庭に面した緑側は来客を迎える場所となる。

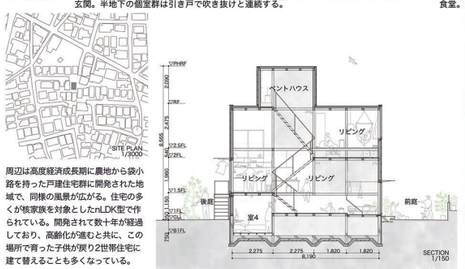
木造フレームで構成し、部分的に柱を抜くことで連続性をつくる。

食堂。6人が集まれる大きさをもつ。

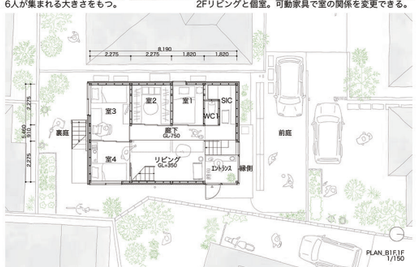
大開口の明るい2Fリビング。2.5Fの個室スペースと緩やかに連続する。

玄関。半地下の個室群は引き戸で吹き抜けと連続する。

2Fリビングと個室。可動家具で室の関係を変更できる。



周辺は高度経済成長期に農地から袋小路を持った戸建住宅群に開発された地域で、同様の風景が広がる。住宅の多くが核家族を対象としたnLDK型で作られている。開発されて数十年が経過しており、高齢化が進むと共に、この場所で育った子供が戻り2世帯住宅に建て替えることも多くなっている。



PLAN_RF

PLAN_2F.2.5F

PLAN_1.5F

白い邸

- 家族構成：夫婦＋子供２人
- 主体構造：木造在来工法
- 階数：地上２階
- 敷地面積：120m2
- 建築面積： 60m2
- 延床面積：120m2

白い邸は、直方体の中心に筒が貫入する形式をもつ。並置と反転を手がかりに、制約を超えた広がりを求めた。高密度な低層住宅地の中で、眺望の開けた屋上を広く確保し、東西に長い天窓を設けることで、上方の豊かな外部環境を家全体に取り込む。与条件から木造２階建てとし、1F に広間、2F に個室をまとめた簡潔な構成としているが、その中心に筒を挿入することで、中間の層を付与している。筒は以下の３つの役割を担う。

① 梁（構造）：「フィーレンデール梁」となって、1F 広間を大らかな無柱空間をすると同時に大梁"梁"として全体構造の中心となる。

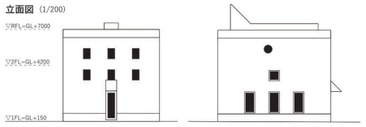
② 橋（動線）：中間階にある「階段室」となって、連続する回廊と共に上下左右に各室を結ぶ。両端部では南北の 外と外 を繋いでいる。

③ 間（収納）：動線沿いの大きな「収納室」となって、雑然と溢れる物々を静かに包み込む。

建物の構成においても、家族の生活においても、筒がこの住宅にとっての核となっている。

不確かな立面 ― スケール感と内外構成の錯綜を生む小さな窓の並置

立面図 (1/200)

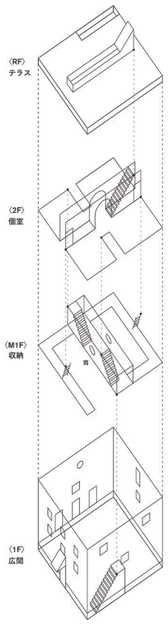


小さな窓を並置し、隣家が近接する外周からの視線を制御しつつ、中からは余白をもった広角の眺めを得る。

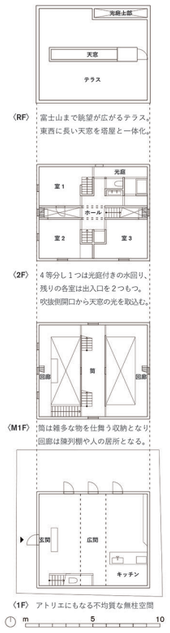
FRP 防水を巻込んだ笠木。光庭に面した丸窓はガラスの無い文字通りの"穴"

対称形平面を重ねてつくる立体的な奥行 ― 対となる空間への認識の広がり

アクソメ



平面図 (1/200)



〈RF〉 富士山まで眺望が広がるテラス。東西に長い天窓を塔屋と一体化。

〈2F〉 4 等分し 1 つは光庭付きの水回り。残りの各室は出入口を２つもつ。吹抜側開口から天窓の光を取込む。

〈M1F〉 筒は雑多な物を仕舞う収納となり回廊は陳列棚や人の居所となる。

〈1F〉 アトリエにもなる不均質な無柱空間

1F は気積の大きい広間、M2F は収納や動線空間、2F には個室や水回りをまとめている。東西に長い天窓を設け、南北にフィーレンデール梁で組んだ筒を架けている。

2F から RF への階段

M1F から 2F への階段

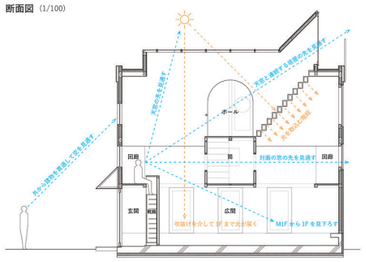
親箱によって間仕切る玄関

2F 各室は M1F への出入口をもつ

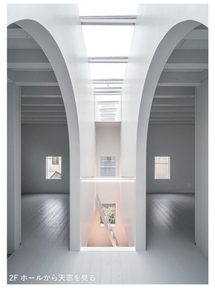
光を取り込む階段

空き間の空間 ― 天窓からの自然光を行渡らせ、各層を貫き関係性を結ぶ

断面図 (1/100)

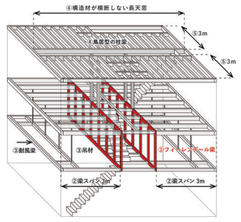


M1F 回廊から筒を見る


2F ホールから天窓を見る

水平なコア ― フィーレンデール梁が構造の中心となり、生活を支えるインフラに

構造概略図



①鉄骨フィーレンデール梁を架ける
⇒小径材のため町工場で製作可能
⇒組んで搬入し現場での工期短縮

②2F 梁スパンが 3m となる
⇒木造の梁が小断面材となる

③2F 梁から 1.5F 梁を吊る
⇒1.5F 梁が外壁の耐風梁となる

④フィーレンデール梁上に鳥居型の柱梁を建てる
⇒構造材が横断しない長天窓となる

⑤RF 梁スパンが 3m となる
⇒梁せいを抑えて最高高さ制限内で十分な天井高を確保可能になる

M1F 筒の中は両端までハンガーパイプを設け、上下階移動の途中にアクセスしやすい収納室となる。

夜間は回廊からの上向き照明で上方を明るく満たす。

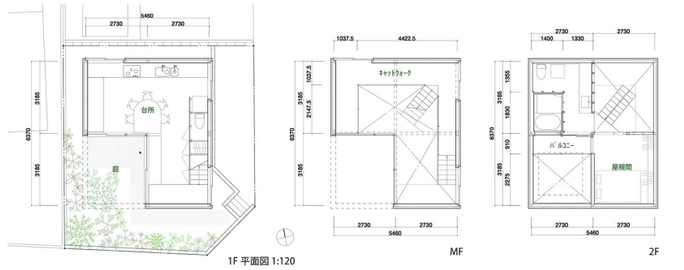
日中は天窓から時と共に移ろう自然光を取込む。

飯田邸

東京郊外の住宅地に建つ延床面積 50.28 ㎡の小さな住宅。
間口 3 間 × 奥行 3.5 間を田の字型平面とし、北側斜線によって導かれた 6 寸勾配の切妻屋根をのせたシンプルな構成である。
田の字の 1/4 を庭、残り 3/4 を室内とした。1 階は庭からアプローチする土間の台所で天井高さ 3845mm としている。
天井高を抑えた 2 階には水廻り設備とベッドを配し、空間全体を立体的に巡るような階段とキャットウォークが絡みつく。
この住宅にはまず「台所と庭」があり、それを味わうようにまたは補完するように居場所や諸機能を計画している。
施主家族にとって 食にまつわる時間と公園の木陰でくつろぐ時間は何よりも大切であり、施主はその時間を家に内包することを望んだ。朝食のいい匂いで目覚め、葉風を感じながら仕事をし、子どもと天体望遠鏡を覗きながら晩酌する。
「台所と庭に住む」ように生きる家族のための家。

配置図 1:1200

敷地は南東の 2 面接道で、南側は人通りの多い T 字路下り坂の突き当りに位置している。
南西の奥行きのある「庭」は、通りからの視線を受け止めプライバシーを確保する緩衝帯であるともに、西側隣家の庭と連続して感じられる奥行きのある明るい環境をつくっている。
屋根の開口部は「庭」に光と雨を届けると同時に、開口に向かうように 2 階に上がると T 字路の開放感とその先にある森への眺望をもたらす。北東の開口部はキャットウォークをまたぐ高さに規格寸法のサッシを取り付けた。
通りからは住人と視線が交差することなく窓越しに庭の緑がのぞく。



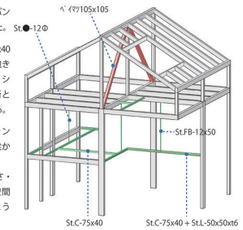
1F 平面図 1:120

a-a' 断面図 1:100　　b-b' 断面図 1:100

2 階の床梁と棟梁でトラスを組み、スパンをとばすことで 1 階を無柱の空間とした。 St●-12Φ

庭に面する窓はサッシの枠を兼ねた 75x40 のチャンネルと 50x50 のアングルの抱き合わせ材の小梁で耐風圧を受け、サッシをカーテンウォールにすることで台所と庭との連続性のある環境をつくっている。

キャットウォークの床は 75x40 のチャンネルを構造体とし、補助的に 2 階床梁から St.ロッドで 1 箇所吊っている。
床というよりは手の届く棚のような高さ・プロポーションになっており、吹抜空間を立体的に補完すると同時に家具のようにも存在している。

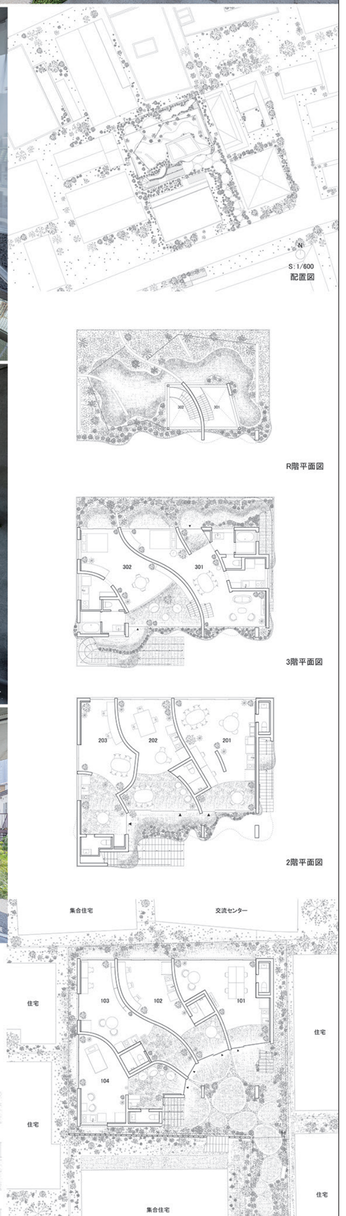


立面図 1:250

■敷地環境
敷地は「名所江戸百景」角筈熊野十二社にも描かれた新宿の小高い丘の上にある。2本の幹線道路がかたちづくるガワに高層ビルが立ち並び、それらに囲まれたアンコには住宅や低層集合住宅が丘に沿うように高低差をもって建ち並んでいる。古くから残る曲がりくねった道を上りこの場所にたどり着く。

301 号室．洗面所や台所などは開閉できる大きな開口を設え、明るい水廻りとした。

202 号室北側を見る．界壁の形状によって各居室の明るさや場の大きさは異なる

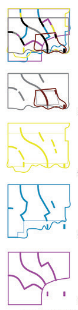


SHINJUKU NEW VILLA

■生きるための場
旗竿敷地に建つ事務所兼住居と長屋の複合建築である。設計が始まったのがちょうどコロナ禍が明けようとしていた頃であった。用途として事務所と長屋の要望であったが、住まうことと働くことの境界が多様になった今、機能や用途から考えるのではなく、人間が生きるための場・生活できる場を考えることにした。その時に、建築自体もスラブと壁、柱といった根源的なものだけで、場をつくることを考えた。

■透明性
壁は全体として通し壁となる部分が分散するように、また、光や風、隣家との関係など、大きな意味でも環境に呼応して外を捕まえるように配し、スラブは生活のライフライン、植物のための土を支える分厚いものとなった。その際、それぞれの場所が均質ではなく、大きい、小さい、明るい、暗い、静か等が感じられるよう、必ずあち ら側とこちら側に差異があるようにスラブや壁柱の関係性を考えた。スラブ先端が隣の部屋まで延びていること、壁柱が他の階と共有されていること、こちらの部屋のくぼみは隣の部屋の膨らみになっていること、それらすべてがその奥への広がりと、壁を隔てた隣を感じる。人間が都市において集合して住まう豊かさを目指した。

■個として、人間として
このような場をつくることにおいて、それらをかたち作るものは、人間的であってほしいと思う。ここでは、スラブも壁柱もすべて手描きの線からかたちを起こしていった。施工にあたり一度型枠によって規定された線となったコンクリートを、たたき仕上げ、洗出し仕上げなどを施し、職人による手で造られたかたちに還元した。



壁柱とスラブの積層図

建築概要
所在地　東京都新宿区
主要用途　事務所＋長屋

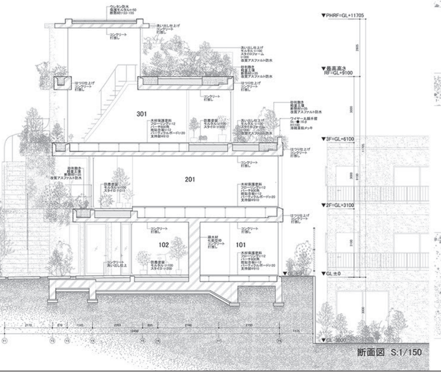
敷地面積　273.11m2
建築面積　175.37m2
延床面積　406.04m2
建蔽率　64.21%（許容：70%）
容積率　148.67%（許容：160%）
階数　地上3階　塔屋1階

寸法
最高高　9,100mm　軒高　9,100mm

構造
主体構造　壁式鉄筋コンクリート造
杭・基礎　べた基礎

工程
設計期間　2022年5月～2023年3月
施工期間　2023年3月～2024年3月

■構造・施工
壁式構造において、シューボックス型のトンネル状の空間では界壁に直交する方向の壁が不足する。今回は、界壁が湾曲することでその弱点を補いながらも抜けのある空間を維持している。また曲面壁・曲線梁が多用されるため梁主筋はなるべく加工しやすいようにD16とし、最も太い部分でもD19とした。その他、傾斜地に立つ敷地北側の擁壁に接地圧を負担させないよう、耐圧版は擁壁からセットバックした位置で配置し、擁壁側は片持ち基礎梁としている。これにより狭小地での重機を用いる改良工事を不要としている。


断面図　S:1/150

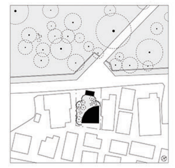
■構成：Structure
構成としては、1階に4部屋、2階に3部屋の事務所兼住居、3階に2部屋の長屋が積層している。旗部に入ったところに広く明るい庭を取り、そこから小径がそのまま延長するようツリー状に部屋を配し、この場所にしかないかたちとなった。

S:1/250
1階平面図

西側、街路より見る。円弧状の外壁面は南からの日光をいなし、庭へ落ちる自身の影を小さく抑える。

居間、食堂、台所。異なる構造的役割と成り立ちで区別された3つの構造体に、一見偶発的に平面をそのまま構成させた。

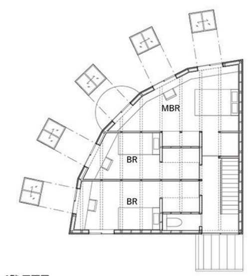
寺の境内から敷地を見る。



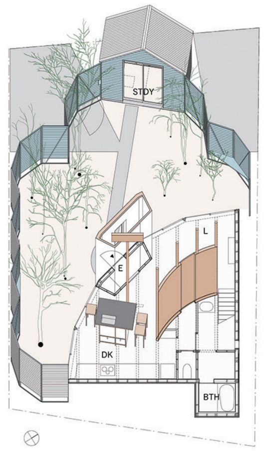
配置図 S=1:1500
寺の森という都市の空白を敷地内へと連続させ、さらにそれをこの家だけで受け止めず隣地までへも引き込んでいくように、敷地奥に母屋を置いた。境内の森が、そこに接する全てのものにとって恩恵であるように、この敷地内の余白も、通りや隣家といった周辺要素に対して利他的でありたかった。

主寝室。放射状の軸線に正体する窓を通じて、自分と外の世界を静かに見つめる。

リビングから庭を見る。境内に生い茂る木々の景色が、共有された背景として上方に奥深く広がる。



2階 平面図
ふたつの世界を客観的に眺める展望台とした。外壁面の多角形の頂点を基点に間仕切り壁を配し、平行に並んだ3つの個室では、放射状の軸線に正体する窓を通じて、自分と外の世界を見つめる。



1階 平面図　S=1:150
耐力壁を担う玄関のホワイトボックス、梁を1本1本支える円弧状に配された丸柱群、鉛直荷重を支えるT字型の柱梁。それぞれに建築全体の構造体よりも一段小さな構えを与え、フェンスやキッチンをも仲間とした異なる形態と言語をもった群が、室内外に立ち現れる。

主寝室から書斎のある小屋を見る。その先に寺。

子供部屋1、2。円弧状の外壁面はミントグリーン色の壁、机、窓で統一される。

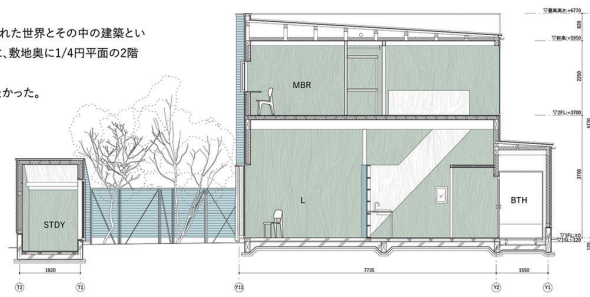
洗面所のヴォリュームと階段。寺に面していない突き当たりの窓のみ黒色枠。

HOUSE BY THE TEMPLE 住宅建築賞2025

ミラーリング・ワールド

寺の門前に建つ家。寺という別世界と向かい合う、暮らしのためのもうひとつの世界をつくる。前面道路を境に寺の世界を鏡に映すように、囲われた世界とその中の建築という同じ構成を敷地内に展開した。また、そうして生まれたふたつの世界の間に、やり取りを与えたかった。寺の余白を敷地内へと連続させるように、敷地奥に1/4円平面の2階建ての母屋を置いた。通りに添えた平屋の離れは、それぞれの世界から別の世界を眺める際の視覚に、具体性を与える道標と見なした。
ふたつの世界は向き合いながら、互いを自身の一部として包含する関係にもある。このプロジェクトを通じて、私たちはそれぞれの世界を認めたかった。

寺と住宅のふたつの余白が周辺の風景をつくるスタディドローイング



断面詳細図　S=1:100

住宅建築賞受賞者プロフィール

ハウスアバブハウス

神田 篤宏
KODA Atsuhiro

1972年：東京都生まれ
1996年：早稲田大学理工学部建築学科卒業
1998年：同大学大学院修士課程修了
1998～2007年：北川原温建築都市研究所
2007年：コンマ,一級建築士事務所comma設立
現在　明治大学非常勤講師

佐野 もも
SANO Momo

1976年：神奈川県生まれ
1999年：横浜国立大学工学部建設学科卒業
2003年：東京藝術大学大学院美術研究科修士課程修了
2003～2005年：北川原温建築都市研究所
2007年：コンマ,一級建築士事務所comma設立
現在、日本女子大学、東京電機大学、千葉工業大学、東海大学、ICSカレッジオブアーツ非常勤講師

CHIGASAKI HOUSE

玉田 誠
TAMADA Makoto

1986年：広島県生まれ
2009年：横浜国立大学工学部建築学コース卒業
2011年：横浜国立大学大学院Y-GSA修了
2011～2022年：山本理顕設計工場
2019年：玉田脇本建築設計事務所共同設立
2022年～：国士舘大学大学院非常勤講師
2023～2025年：横浜国立大学大学院Y-GSA設計助手
2025年～：関東学院大学非常勤講師

脇本 夏子
WAKIMOTO Natsuko

1987年：神奈川県生まれ
2009年：日本女子大学住居学科卒業
2011年：横浜国立大学大学院Y-GSA修了
2011～2024年：東 環境・建築研究所
2019年：玉田脇本建築設計事務所共同設立
2021年～：日本女子大学非常勤講師
2025年～：芝浦工業大学非常勤講師

白い邸

竹内 吉彦
TAKEUCHI Yoshihiko

1987年：愛知県生まれ
2010年：東京理科大学（小嶋一浩研究室）卒業
2012年：カタルーニャ工科大学（ETSAB）留学
2012年：Lapeña y Torres Arquitectos インターン
2013年：東京藝術大学大学院（トム・ヘネガン研究室）修了
2014年：AS（旧称 青木淳建築計画事務所）勤務
2021年：tデ 設立

飯田邸

中村 俊哉
NAKAMURA Toshiya

1983年：東京都生まれ
2007年：早稲田大学理工学部建築学科卒業
2009年：早稲田大学大学院創造理工学研究科修士課程修了
2012～2015年：株式会社芦沢啓治建築設計事務所勤務
2014年：ship architecture
2020年：ship architecture Inc.設立

藤井 愛
FUJII Ai

1984年：京都府生まれ
2008年：大阪芸術大学芸術学部建築学科卒業
2011年：早稲田大学大学院創造理工学研究科修士課程修了
2012～2013年：畝森泰行建築設計事務所勤務
2014年：ship architecture
2020年：ship architecture Inc.設立

SHINJUKU NEW VILLA

南 俊允
MINAMI Toshimitsu

1981年：石川県生まれ
2006年：東京理科大学大学院小嶋一浩研究室修士課程修了
2006～2017年：伊東豊雄建築設計事務所
2017年：南俊允建築設計事務所設立
2017～2020年：横浜国立大学大学院 Y-GSA設計助手
2020～2025年：横浜国立大学大学院 Y-GSA助教
現在、横浜国立大学、東京理科大学、多摩美術大学非常勤講師、東京理科大学共同研究員

House by the temple

隈 翔平（写真:左）
KUMA Shohei

1983年：福岡県生まれ
2007～2014年：マウントフジアーキテクツスタジオ勤務
2017年：ミラノ工科大学大学院修了
2018年～：KUMA & ELSA共同主宰
2024年～：九州大学非常勤講師
2024年～：IED Kunsthal（スペイン）非常勤講師

エルサ・エスコベド（写真:右）
Elsa ESCOBEDO

1990年：ビルバオ（スペイン）生まれ
2016年：ソルボンヌ大学大学院（フランス）修了
2016～2018年：What if: projects（イギリス）勤務
2018年～：KUMA & ELSA共同主宰
2023年：スイス連邦工科大学ローザンヌ校（EPFL）修了
2024年～：IED Kunsthal（スペイン）非常勤講師